報告1
「多摩川源流のむらづくり」

青　柳　　諭 氏
山梨県小菅村　源流振興課長

こんにちは。山梨県小菅村から来ました青柳と申します。よろしくお願いします。私がなぜここに立っているかと言いますと、ここの大学の木俣先生に長年私どもの村に入ってきていただいていまして、特にここ数年、雑穀などの研究にお付き合いした関係で、本日のこの場で小菅の事例を紹介できないかと言われましてここに来ている次第です。

（以下、パワーポイントを使い説明）

まず見せたいものがありまして、これは大菩薩峠でございます。多摩川は川崎の方まで138㎞流れているわけですが、源流は小河内ダムを境に小菅村の方は支流になっております。20年ぐらい前から多摩源流ということを言ってきていますが、多摩川源流としないのは、川をつけてしまうと、源流部には位置しているんですが本流ではないんじゃないかと言われてしまうので、多摩源流と川を取ってしまいました（笑）。つまり大きな意味での源流ですよという意味で、むらづくりを進めています。そんなことでここはちょうど分水嶺でして、富士山側には笛吹川の方に水が流れていまして、こちら側に小菅村がありますからこう多摩川の方に水が流れていくと、そういう位置関係でございます。

村民は東京都西多摩郡小菅村と思っています。というのも、買い物は青梅市に行きますし、電話番号は東京の青梅番号、それから電気も青梅の方からラインを引いています。といったことを考えると、なんで山梨なのかなということを、私も小菅で生まれ育った者ですから、そういう風にずっと思っていました。実は合併が色々と騒がれていまして、アンケートを取っても東京へ行きたいと言っている人がたくさんいるんですが、なかなか叶いません。政治的な問題があったり、国の問題があるので。今このエリアを見ていただいている通り、山梨県の一番外れの分水嶺に位置し、東京の方に水が流れているので、文化も生活圏も言葉も東京に近いです。私たちは甲州弁を使っていません。どちらかというと青梅の言葉です。

小金井へ来て思うことは、本当に真っ平らなんだなということです。小菅はというと首が疲れてしまうくらい山が急で角度があります。大学時代、友達が遊びに来ては「おい首が疲れるぞ」なんて言われていました。逆に言うと自然が豊かだと言えます。

人口のことを言うとちょっとがっかりしてしまうところがあるんですが、2200人いた人口が今は今年の三月ついに1000人を切りまして959人、昨年の国調で言いますと1018人なんですが、なかなか厳しい過疎の村であると言えます。あまり自分たちでは過疎と言いたくないんですけれど、周りからはそう思われるかもしれません。しかし自分たちは過疎と思っておりません。

村の産業の話をしますと、ほとんど第三次産業で、第一、二次産業は厳しいです。特に一次産業については厳しいです。

これから画像のバックに出てくる植物は小菅村に生えている植物を撮ったものです。

私は昭和53年に役場に勤めたわけですけど、56年に総合計画を策定し、色々な政策を展開しましょうと言うことで、まず基盤を整備しなければいけない中で、下水道事業、小菅村は16年くらい前から下水道の普及率が100％でして、多摩川の源流でまず水をきれいにして下流に送らなければならないと考え、57年から着手しました。下水道は100％きれいな水を下流に送っていると自負しております。

それから源流祭りというのを62年からやり始めたんですが、これはむらづくりとして交流をしようということです。今回のエコミュージアムなんかもそうですけど、多摩川流域の関連で上流から下流まで一体的に、一緒の考えを持って、上流から下流、下流から上流と相互に発信しないと、一つの小さな村を守っていけないと思ったわけですから、こんなお祭りをまずしてみました。全然小菅村は知られていませんでした。昔は東京の方へ出て来ると山梨県小菅村なんて恥ずかしくて言えなかった時代があったんですが、今では堂々と小菅村と子供たちも口にしているようです。

観光的には何をやったかと言うと、温泉を作りました。毎年10万人の人がコンスタントに訪れています。ほとんどは多摩地域の人、所沢方面の埼玉の人、他にも横浜の人なんかで、流域方面の方々が98％でして、残りの人が山梨県の近隣の方で、なんとか峠を越えてやってくるということです。山梨から来るにはほとんど峠を越えなければいけないんですが、私たちは流域ですから峠なくして東京の方まで出てこられますから、先程言いましたように住民はみんな頭の中は東京都民

だと思っています。

平成12年に、源流郷をもう一度見直して作っていこうということで、小菅村総合計画を策定しました。その中で大きなことは多摩川源流研究所を作ったことです。今日こちらに井村さんがいますけど、彼女が初代研究所の研究員です。というのも情報発信するのに今まで祭りだけだったので、もっと下流に情報発信していこうことになりました。それで研究所を作りまず地元の自然の調査、研究をして、まずは自分たちの足元をはっきり見ようということで、先生たちに同行しながら研究しました。それから、地元の情報を出すということです。『源流の四季』という冊子を皆さんのお手元にも配ってあります。中には活動報告というか、こんなことをやっていますよということが詳細に書いてあります。これを多摩川流域の学校ですとか市区町村の役所に、直接、研究所職員が持って行って配布しています。送ってしまうと棚に埋もれて終わりになる可能性があるので、毎回自分で行って届けています。そういうことの効果があって、後でお話しするような色々な体験に繋がっていくところがあります。源流研究所というのは村の管理で、私は研究所の事務局長を兼任しているんですけれども、これからもむらづくりの中で大きな役割になっていくんじゃないかなと思っています。

それから、環境保全も考えていかなければいけないということで、簡単に紹介しますけれども、まず山が荒れていると。戦後4～50年植栽してきた木がほとんど伐採されない。切っても、大根一本にしかなりません。50年育てた木がですよ。出してももらえるお金は大根一本分です。百円ちょっとです。誰も山をやる気にはなりません。そんなことで何とかして山を改善させようということで、切った木をオガ粉にして、村の中の生ごみを混ぜて堆肥とし、それを村民の畑に還元してまた作物を作っていただいて、温泉の施設の物産館で売っていただいたり、自分で食べた分はまた残渣としてまた利用したりと、小さなリサイクルをやろうということで活動しています。また小菅人を育む会というのができまして、これは自分たちの子供をしっかり育てようという活動です。この活動も環境教育活動の一環でして、まず源流域の子供は自分の住む場所をもっと知らなければいけないんじゃないかと思います。小菅の子供も実はテレビゲームばかりやっているような情けないというか、今の時代だからしょうがないんでしょうが、そういう子が多いんですが、それをちょっと外れて、せっかく身近にある自然に触れてもらおうということで山に入って、冬は雪の中を歩いて獣の足跡を見つけたり、夏は川に行って、秋はきのこや野草を取りに行って天ぷらにして食べたり、そういった今の大人が昔してきたことを子供に教えています。

それから自然再生協議会、森林再生プロジェクトというのが動いています。小菅村の自然再生の協議会というのをいち早く立ち上げまして、全国の村の中では初めて法律上の協議会の設立を見まして、4番目に認定を国から受けて活動をしています。それと今年から百年の森づくりということで、百年先を見据えた造林をした森づくりをしようと活動しています。先程一本百円というお話をしましたがこれを変えていこうと。青梅の辺りでは東京の木を使って家を作ろうということで、下流の人が奥多摩湖で多摩川は終わっていると思われている方が多くて、遠足で奥多摩湖に来ればその向こうには人が住んでいないだろうと思われるらしいんですが（笑）、実際は2000人弱ぐらい住んでいます。まあ私もその中の一員です。隣の丹波山村が870人程で、両村合わせて2000人に満たない人数で地域を守っています。人がいなくなれば荒れるというのが源流です。これは人がいなくなれば負荷がなくなってきれいな水が出るだろうと思いがちですが、山が荒れて十年後に木が倒れれば土砂が入ってきれいな水は出てきません。そんなことで私たちは一生懸命、地元の山を守っていきたいと思いますので、百年の森づくりというのを継承していく取り組みを始めたところです。

また高齢化も当然進んでいます。小菅村の高齢化率は34％、山梨県は合併して29の市町村があるですが、その中でも後ろから4番目という高齢化率です。一番小さな村の一つに入りまして、他の村に比べるとまだましみたいですが、いずれにせよ高いレベルで高齢化が進んでいますのでなかなか大変な状況です。

そんな中でも少し特異的なものに、中学三年生になりますとオーストラリアに修学旅行に行きます。温泉からあがった収益で補助金を出しています。当然個人負担もあるんですけれど。それについては田舎の子だからせめて英語ぐらいはできないかということで、小学四年生から英語教育をやっていまして、中学三年でオーストラリアに行くころにはある程度英語には困らないようです。私なんかは全然駄目なんですけどね、今の子供は帰ってくると「英語通じたよ」なんて言っています。これも小さな村だからできる教育の一環かなと思っています。

先程合併の話をしましたが、うちの村長はしばらくは単独でいこうと言っています。かなり厳しいです。地方交付税が減らされているものですから。全国の源

流域は同じような悩みを持っています。そこで私たちは昨年11月30日、東京へ全国の八つの源流の市区町村長に集まっていただいて全国源流の郷協議会というのを作りました。事務局は、一応私ども小菅村が務めさせていただき、うちの村長が会長ということで小菅村から発信して、全国の源流域の同じような悩みを持った自治体からいろんな政策を考えて国に提言していこうと、林野庁、環境省、国交省の方を交えて議論しております。そういったことが果たして通じるのかどうか、難しいところではあると思います。小さなところは潰していくようなところが今の国の政策にはあります。現実は厳しいですが、決して負けないつもりです。

これは夜のお祭りの様子です。なかなか立派でしょう。今年は狛江の市長さんが来てくれました。山伏の格好をして口上を述べる係りがあるんですが、村長をなんとか説き伏せまして村長がやりました。20回記念ということもありなかなか良いイベントができたと思っています。

それからこれは温泉ですね。皆さん小菅を訪れた際には是非寄ってみて下さい。コマーシャルも兼ねております（笑）。

こういう36ｍの滝もあります。これは本流にかかっているところです。今日のこの後、鈴木眞智子さんからお話がありますけれど、川崎水辺の学校が源流に体験に来ます。すぐこの下の滝つぼに子ども達がドボンと飛び込みます。すると来たときトロンとしていた目がキラッとして帰っていきます。お陰で7月8月と私共は休みがありません。こういった体験学習の案内もしていますので。

それとこの奥に行くと、今まで村民も知らなかった、うちの所長が発見し名付け親になった、妙見五段の滝があります。ここには簡単には歩いては行けません。今年はここに訪れるイベントも計画してあります。私も行ってみましたが、かなり大変でした。

小菅の特産品としてはこんなものがあります。漬物やわさび、それから多摩源流水というのがあります。この水は商標登録していますので、多摩源流という言葉は他では使いません。これからは水の時代ですから、これが世にたくさん出て行くんじゃないかなと思っています。

交流としては水源林の旅ですとか色々やっていまして、その中に森林再生ボランティアがあります。三年間、皆さんに間伐や枝打ちなどをやってもらい18haの山を作ってもらいました。奥多摩駅まで迎えに行きますけども、各自に少々負担してもらってそういったことをやってもらっています。この方々がファンになって、どんどんリピーターとして来ていただいています。それからこれは源流体験です。源流の沢は道が無いんですね。そこで子供が転んで怪我しても、自分で起きなさいと言って我々は一切手伝いません。親は後ろの方にいてサポート隊をするんですが、最小限の怪我は自分の責任で、自分の力で川を歩きなさいと言って、これも環境教育ということで、厳しい態度で子供たちにあたっています。それから一般の方には大菩薩探訪の旅というものがあります。小菅に泊まっていただいて一泊二日で大菩薩峠を様々に案内しております。秋になると干し柿づくりを体験してもらっています。小菅の柿を取って皮を剥いて干して、あとはできた干し柿を送るというようなことをしています。以前は源流研究所でやっていたんですが、今では観光協会でやっております。

これがオガ粉と生ごみを混ぜて作った堆肥です。これを詰めたものがこちらの製品です。この左にあるのが土壌改良材といって生ごみからできたものです。これは小菅の湯で売っております。そして右がヒノキオイルです。実はヒノキからオイルが取れるんです。とても良い香りなんですが、今日持ってくれば良かったですね。スプレーとオイルがあって、オイルは風呂に入れると檜風呂のようになります。気持ちがリフレッシュされるということで売っていますので、小菅の湯にお越しの際は是非どうぞ。

今後の取り組みは、まず自然エネルギーを使ってCO_2の削減にならないという話の中から、企業が入って源流の木のブランド化をするようなことを、東京電力の力を借りてやっています。源流の木を下流に運んで下流に家を建てるというプロジェクトが実は一つ動いています。大田区の修道院を建てるために小菅の木を使って建てるということをやっています。

それからバイオマスを利用できないかということを検討しています。先程オガ粉を使っていると言いましたが、熱エネルギーとして使えないかということで検討しています。特に小菅の湯で使っている重油です。それこそCO_2をどんどん排出していて、まあやらざるを得なかったんですが、そこをどうにか変えていけないかと考えています。

あと学芸大にも関係のあるエコ農業ということで、減農薬、減化学肥料を進めています。今、ポジティブリストというのが制度として始まりまして、農薬の散布濃度がある一定限度を超えると売れなくなってしまうといったこともあります。そういうことも考えながら、

特に雑穀を中心とした展開を、ここの大学の協力をいただきながら、現実に進めています。雑穀は今、温泉の食事などで提供しています。

また企業の話ですが、実はホンダが山を何とかしようと小菅に入ってきています。企業の森づくりということで、ホンダの森づくりをホンダのお金でやっています。もう一つ、JTが去年から環境の森をつくるということで、やはり森林の整備をしようと活動し始めています。ということで、小菅の方にそれだけ企業が参画し始めていただいています。大変有難い話です。

これは百年の森づくりの一環で、一般の方々が山に調査に行って、樹幹投影図と言うんですけど木の位置全部を測ってきてもらって、それを図面に書いて勉強します。この人たちは二度三度参加すると、ある程度、次の人に教えられるような案内人になってもらいます。ほとんど東京の人が参加してくれています。

そんなことで、森林再生、文化再生、源流・景観再生といった大きな目標の中で、色々な事業を行なっています。これも下流の方々に運営委員として入っていただいて、活動をしています。

それから森林に入るエコセラピーというのが流行りになっていますが、昨年、遊歩道を2km新しく作りました。小菅村の中にエコセラピー研究会というのがありまして、その人たちと一緒に、下流から来た人たちに一緒に山を回りながら案内をするというような活動もしています。

ということで、企業が参画してきた関係で私共も色々と取り組みが進んできています。流域の人たちと一体的な、流域全体で源流を守っていってもらいたいということで、源流域と環境で捉えた企業が参画して、まだ思考中なんですが、源流通貨といって、環境で通貨を回していこうという考え方もあります。

最後にもう一点だけお話させていただきたいですが、源流大学構想というものを、考えております。この付近の東京エリアの大学にコンソーシアムを組んでいただき、小菅村の全域をフィールドとした源流大学としてカリキュラムを作っていただいて、小菅へ行けば単位が取得できるというような構想を、木俣先生を中心とし、他の大学の先生方と色々と研究しているところです。うまくいけば、何とか小さなところから大学のフィールドとして、源流大学作っていきたい。これが成功すれば、先程お話した全国源流の郷協議会の中の他のエリアに、源流を守る一つの手段として示せるのではないかと思っています。

というわけで、こんなことでむらづくりをしているわけでございます。

後何年、小菅村があるかわかりません。実はあと5年くらいしかないのかもしれませんが、私達の地域を下流の人々のお力をお借りし守って行きたいと思っています。今後ともお力添えよろしくお願いしまして、発表に替えさせていただきます。ありがとうございました。（会場、拍手）

＜講師プロフィール＞

青　柳　　諭（あおやぎさとし）

山梨県　小菅村　源流振興課長

1955年3月31日生まれ。法政大学土木工学課卒業後、小菅村役場に勤める。平成12年7月より振興課長（現在は源流振興課長）。小菅村と都市農村の交流を進める担当として多摩源流をキーワードに活動を行っている。

報告2
「多摩ニュータウン・オアシスの新たな公園管理スタイル」

内　野　秀　重　氏

八王子市長池公園自然館　副館長

長池公園から参りました、内野と申します。よろしくお願いします。私自身は立川で生まれ育ちまして、小学校高学年の時に朝一時間くらい多摩川で釣りをしてから学校に行くというような生活をしてきた記憶があります。ですから、今日このような多摩川に関するフォーラムの場でお話をさせて頂けることを大変光栄に思います。さきほど小菅村のダイナミックな自然を見せていただいてうらやましく思いましたけれども、私の話は、多摩川の一支流の源流にも、こんな自然の豊かな場所があるんだというようなお話をさせていただければと思っております。

長池公園という所は、八王子市の南の端、もう、すぐ南側が町田市というようなところにあります。多摩丘陵はⅠ面、Ⅱ面とで高低差がありますが、その高い方のⅠ面に位置していまして、標高が大体100mちょっと超えています。水系で言いますと、ちょうど多摩市内で多摩川に合流している大栗川、その川を遡った